

## 公衆場面での化粧行動における規範意識と依存性

国際日本文化研究センター 研究員 平 松 隆 円

### 抄 録

なぜ、若者は電車内などの公衆場面で化粧をおこなうのか。ある調査によると、10歳代の約40%は電車内での化粧に抵抗なく、約30%が実際に経験している。しかしながら、50歳代では約8.5%に抵抗がなく、実際の経験も6.5%と低下する。これは、社会や集団において個人が同調することを期待されている行動や判断の基準である規範意識に差があるからと仮説できる。また、従来からのアルコールや薬物に加え、近年では携帯電話などの依存性が社会問題化している。化粧と依存性との関係について、化粧そのものに気分の高揚感が存在することから、公衆場面で化粧行動をおこなう者は、ある程度の依存状態にあるのではないかと仮説できる。

そこで本研究は、公衆場面における化粧行動と規範意識や依存性について検討をおこなった。結果を要約すると、以下の通りになる。

- 1) 実際の化粧行動は、『日常的化粧行動』と『非日常的化粧行動』に構造化され、公衆場面での化粧行動は『不特定他者場

面』と『特定他者場面』に構造化された。そして、男性では『非日常的化粧行動』が『不特定他者場面』と、『非日常的化粧行動』が『特定他者場面』と有意な正の相関関係を、女性では『日常的化粧行動』が『特定他者場面』と、『非日常的化粧行動』が『不特定他者場面』と有意な正の相関を示すことがわかった。

- 2) 男女とも『不特定他者場面』『特定他者場面』のそれぞれを規範意識が有意に規定することはなかった。
- 3) 男性では『不特定他者場面』を情動的依存が負に有意に規定することが、女性では『不特定他者場面』を情動的依存が負に有意に規定することが、『特定他者場面』を情動的依存が正に有意に規定することがわかった。

キーワード：化粧、公衆場面、規範意識、依存性、個人差要因、男女差、大学生

## はじめに

1990年代半ばから、電車内などの公衆場面で化粧をおこなう若者たちが話題になってきた。

なぜ、若者は公衆場面で化粧をおこなうのか。その理由について、いくつかの指摘がなされてきた。例えば、「化粧をして完成した顔ではなく、自己を表現するものとして化粧のプロセスを見せる」とする米澤（2001）の指摘がある。また、同じ価値観を共有する仲間との人間関係が濃厚になるほど、他の人間関係が希薄化し、公共場面に居合わせる人々の存在を気にせず、化粧をしているとの菅原（2005）の指摘もある。

公衆場面における化粧行動に関する実証的な研究として、これまで平松（2007）（2010）がいくつかの知見を積み重ねてきた。それらによると、公衆場面における化粧行動は、その場面の対人接触の高低による『社会的場面』『個人的場面』により構成されていることが明らかとなり、化粧の入念度の高い場面では、公衆場面における化粧行動も高いことが明らかとなっている。これは、米澤（2001）の指摘を支持する結果であり、平松・牛田（2003）が明らかにした化粧への関心の高い者ほど化粧行動をよくおこなうとする結果と関連する。

また、男女とも不特定他者がいる比較的公的な場面で社会的にも化粧をしてよいと考えている者は、特定・不特定の他者の存在に関係なく化粧行動をおこなっていることが明らかとなっている。これは、不特定他者がいる比較的公的な場面で化粧行動をおこなっている者は、他者の視線を気にしていないと推測され、菅原（2005）の指摘を支持する結果である。

このような指摘がなされるものの、実際にはどの程度、電車内や駅などで化粧がおこなわれているのだろうか。

ベネッセ（1999）は、高校生を対象に調査をおこない、15.8%の者が電車内や街で化粧をす

ることを「絶対やめて欲しい」と回答したのに対して、50.4%の者が「特にかまわない」と回答したことを報告した。この数値は、学年が上がるにつれ増加傾向を示している。中央調査報（2001）は、全国20歳以上の男女約1400人を対象に調査をおこない、全体では66.0%が電車内の化粧を「気になる」と回答し、男性は58.2%が、女性は73.2%が、電車通勤・通学者は71.8%が、非電車通勤・通学者は65.0%が「気になる」と回答したことを報告した。ポーラ化粧文化研究所（2008）は、電車内での化粧に10歳代では38.8%の女性に抵抗がないものの、50歳代ではその割合が8.5%と低下し、年代が上がるほど抵抗があることを明らかにしている。また、10歳代では28.5%が、20歳代では38.3%の者に電車内での化粧経験があるものの、30歳代以降低下し、50歳代では6.5%の者に電車内での化粧経験があることが明らかとなっている。

このような世代間における公衆場面での化粧行動に関する差は、規範意識が影響していると考えられる。

人々は、社会的な場面で暗黙のうちに行動を規定する何らかのルール、すなわち、社会や集団において個人が同調することを期待されている行動や判断の基準である規範を共有している。化粧についても平松・牛田（2007）によって、その規範意識の存在が明らかにされている。

風間・秋山（1981）は、青年の意識や行動の変化を把握する目的から、全国規模の一般国民対象の意識・世論調査の回答を分析し、青年の意識の変化を次のように特徴づけた。すなわち、生活領域においては、「社会より個人」を重視し、現在中心の私生活快楽が強まっていることから、私生活主義の深化が進んでいる。このことは、現代の若者が社会との関わりに消極的であり、自分自身のことや身近な生活への関与や関心が増加していることを意味している。

したがって、若者と年配者とのあいだで公衆場面における化粧行動に対する規範意識が異なることが推測される。そこで本研究は、異世代間における化粧規範に関する予備的研究として、若者の公衆場面における化粧行動と規範意識との関連について検討をおこなう。

公衆場面における化粧行動は電車内だけではなく、さまざまな場所でおこなわれている。あたかもそれは、化粧に依存し、それがないと身体的・精神的な平常を保てなくなるかのような印象を受ける。

WHO（世界保健機関）の定義によれば、精神に作用する化学物質の摂取や、ある種の快感や高揚感を伴う行動を繰り返しおこなった結果、それらの刺激を求める耐えがたい欲求が生じ、その刺激を追い求める行動が優勢となり、その刺激がないと不快な精神的・身体的症状を生じる、精神的・身体的・行動的狀態を依存症とよんでいる。依存症には、アルコール依存症のような物質に対するものと、インターネット依存症のように行動に対するもの、共依存のように人間関係に対するものがある。

従来からのアルコール、薬物、パチンコ、買い物に加え、近年ではインターネット、携帯電話などの依存も社会問題化している。化粧行動と依存との関係性についての研究は見当らないものの、化粧行動そのものに気分の高揚感が存在することから、公衆場面で化粧行動をおこなう者は、ある程度の依存状態にあるのではないかと仮説できる。

そこで本研究では、公衆場面における化粧行動とその依存性についても合わせて検討をおこなう。

## 研究の目的

本研究の目的を整理すると、以下の通りとなる。

### ①公衆場面における化粧行動と規範意識との関

連について検討をおこなう。

### ②公衆場面における化粧行動とその依存性について検討をおこなう。

## 研究の方法

### 1) 調査方法と調査時期

関西の大学生を対象に、集合法で質問紙調査を実施した。

倫理的配慮として、調査票に研究の目的を明記し、回答は任意であり、無記名で個人が特定されることがないことを事前に口頭で説明した。

調査対象者は、男性 329 人 ( $M=18.80$  歳,  $SD=1.16$ )、女性 299 人 ( $M=18.99$  歳,  $SD=1.58$ ) の合計 628 人 ( $M=18.73$  歳,  $SD=1.21$ ) であった。

### 2) 調査内容

#### i 実際の化粧行動

若者たちの化粧行動の実態を調べるため、化粧行動を 20 項目選定し、それぞれの化粧行動をどの程度おこなうかについて、「まったくしない (0)」から「毎日する (365)」までの年間行動回数を回答することを求め、得点化をおこなった。

なお、化粧とは薬事法によると「人の身体を清潔にし、美化し、魅力を増し、容貌を変え、又は皮膚若しくは毛髪を健やかに保つために、身体に塗擦、散布その他これらに類似する方法で使用されることが目的とされているもので、人体に対する作用が緩和なものと定義される。

本研究では、薬事法における定義をふまえ、具体的な化粧行動について平松 (2009) の分類に基づき、装飾 (ファンデーション、ヘアスタイリングなど)、肌の手入れ (化粧水、乳液など)、香り (フレグランス、デオドラントなど) を化粧として扱い、男女共通しておこなわれるであろう化粧行動を選定した。

## ii 公衆場面での化粧行動

平松 (2010) と同じ、駅のホーム、授業中の教室、電車のなか、ファミレスなどからなる公衆場面 26 項目を用いた。

それぞれの場面で化粧行動 (化粧直しを含む) をおこなったことがあるについて、「まったくない (1)」から「よくある (5)」までで回答することを求め、得点化をおこなった。

## iii 規範意識

久世ら (1988) によると規範意識とは、人は自己の意識、態度、価値観などを明確化するが、家庭や学校、社会における対人関係などにおいて、多くの者によって共有されている伝統的・慣習的な言動についての基準や習慣などに対する意識である。

本研究では、久世ら (1988) の社会意識尺度から規範意識 21 項目を用いて、「まったくない (1)」から「よくある (5)」までで回答することを求め、得点化をおこなった。内的整合性の観点から、「自分の考えと合わなければ、慣習など無視してよい」をのぞく 10 項目で因子得点を算出した ( $\alpha=0.81$ )。

## iv 依存性

辻 (1969) によると依存性とは、是認、指示、助力、保証などの源泉として事物を利用しないし頼りにする程度であり、道具的依存と情動的依存の二つの下位尺度から構成されている。道具的依存とは自己の要求または課題解決の実現のために依存する程度であり、情動的依存とは自己の心情的な安定を求めるために依存する程度である。

本研究では、辻 (1969) の依存性テスト 20 項目を用いて、「まったくない (1)」から「よくある (5)」までで回答することを求め、得点化をおこなった。内的整合性の観点から「他人から指図を受けるのが嫌いである」「自分の

意見を押し付けるよりも、他人の話を聞くタイプである」「知らない人の前でも、平気で話ができる」「一人だけで時間を過ごすことが多い」をのぞく、道具的依存 9 項目と情動的依存 9 項目で因子得点を算出した (道具的依存:  $\alpha=0.67$ 、情動的依存:  $\alpha=0.66$ )。

## 3) フェイス項目

年齢と性別を回答させた。

## 4) 統計処理

PASW Statistics 17.0 を用いて分析をおこなった。二者間の差の検定をおこなう場合、事前の手續として、Levene 検定により等分散性を確認した。不等分散であった項目については Aspin-Welch の t 検定を、その他については Student の t 検定をおこなった。

## 結 果

### 1) 実際の化粧行動の構造

実際の化粧行動の構造を明らかにするため、評定平均値をもとに、それぞれ主成分分析分析 (Varimax 回転) をおこない、構造化を試みた。

TABLE1 化粧行動の主成分分析(varimax)

	日常的化粧行動	非日常的化粧行動
アイメイク	<b>0.84</b>	0.16
ベースメイク	<b>0.82</b>	0.11
顔保湿	<b>0.78</b>	0.14
UVケア	<b>0.72</b>	0.12
唇保湿	<b>0.71</b>	0.16
脱毛	<b>0.56</b>	0.30
顔クレンジング	<b>0.53</b>	0.00
ピアス/イヤリング	<b>0.43</b>	0.30
手・足・肘・膝保湿	<b>0.41</b>	0.40
髪トリートメント	<b>0.34</b>	0.21
髪スタイリング	<b>0.29</b>	0.22
鼻パック	0.02	<b>0.79</b>
顔パック	0.06	<b>0.79</b>
カラーリング	-0.05	<b>0.59</b>
マニキュア	0.31	<b>0.47</b>
香水	0.26	<b>0.41</b>
整眉	0.36	<b>0.40</b>
デオドラント	0.34	<b>0.40</b>
頭皮クレンジング	0.12	<b>0.37</b>
オイルコントロール	0.24	<b>0.34</b>
固有値	4.63	3.08
累積寄与率 (%)	23.14	38.55
$\alpha$	0.84	0.65

TABLE2 公衆場面での化粧行動の主成分分析 (Varimax)

	不特定他者場面	特定他者場面
病院の待合所	<b>0.86</b>	0.24
近所のスーパー	<b>0.85</b>	0.19
劇場のなか	<b>0.85</b>	0.30
コンビニ	<b>0.82</b>	0.17
エレベーターのなか	<b>0.79</b>	0.17
図書館	<b>0.76</b>	0.33
ホテルのロビー	<b>0.76</b>	0.35
屋外のオープンカフェ	<b>0.75</b>	0.44
バス停	<b>0.73</b>	0.37
映画館	<b>0.70</b>	0.43
公園	<b>0.68</b>	0.42
居酒屋	<b>0.62</b>	0.56
デパート	<b>0.56</b>	0.46
同性の友人の家	0.14	<b>0.83</b>
トイレ	0.01	<b>0.80</b>
休み時間の教室	0.38	<b>0.78</b>
ファミレス	0.43	<b>0.77</b>
カラオケボックス	0.31	<b>0.77</b>
自動車のなか	0.26	<b>0.77</b>
電車のなか	0.35	<b>0.75</b>
駅のホーム	0.42	<b>0.69</b>
学食	0.53	<b>0.67</b>
バスのなか	0.53	<b>0.64</b>
クラブ/サクルの部屋	0.41	<b>0.62</b>
授業中の教室	0.54	<b>0.57</b>
異性の友人の家	0.50	<b>0.55</b>
固有値	9.44	8.33
累積寄与率 (%)	36.31	68.33
$\alpha$	0.96	0.95

なお、因子の選定は、Kaiser-Guttman による最低固有値 1.0 を基準にした。

実際の化粧行動では (TABLE 1)、2 因子が明らかとなった。第 1 因子は、アイメイク、ベースメイクなど日常的におこなわれている化粧行動項目が高く寄与したため、『日常的化粧行動』と命名した。第 2 因子は、鼻パック、顔パックなど毎日のようにおこなわれない化粧行動項目が高く寄与したため、『非日常的化粧行動』と命名した。

この 2 因子で簡便因子得点 (各因子をより明確にするため、因子ごとに高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する方法) を算出し (『日常的化粧行動』:  $\alpha=0.84$ 、『非日常的化粧行動』:  $\alpha=0.65$ )、以後の分析データとした。

## 2) 公衆場面での化粧行動の構造

公衆場面での化粧行動の構造を明らかにするため、評定平均値をもとに、それぞれ主成

分分析 (Varimax 回転) をおこない、構造化を試みた。なお、因子の選定は、Kaiser-Guttman による最低固有値 1.0 を基準にした。

公衆場面での化粧行動では (TABLE 2)、2 因子が明らかとなった。第 1 因子は、病院の待合所、近所のスーパーなどの項目が高く寄与したため、『不特定他者場面』と命名した。第 2 因子は、同性の友人の家、トイレなどの項目が高く寄与したため、『特定他者場面』と命名した。

この 2 因子で簡便因子得点 (各因子をより明確にするため、因子ごとに高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する方法) を算出し (『不特定他者場面』:  $\alpha=0.96$ 、『特定他者場面』:  $\alpha=0.95$ )、以後の分析データとした。

## 3) 実際の化粧行動と公衆場面での化粧行動の男女差

実際の化粧行動と公衆場面での化粧行動の各因子の男女差を確認するため、t 検定をおこなった。

その結果、実際の化粧行動では (TABLE 3)、『日常的化粧行動』と『非日常的化粧行動』のそれぞれで有意な男女差が認められ、男性は女性に比べ実際の化粧行動をおこなっていないことが明らかとなった。

公衆場面での化粧行動では (TABLE 4)、『不特定他者場面』と『特定他者場面』のそれぞれで有意な男女差が認められ、男性は女性に比べ公衆場面で化粧行動をおこなっていないことが明らかとなった。

## 4) 実際の化粧行動と公衆場面での化粧行動の関係性

実際の化粧行動と公衆場面での化粧行動の各因子の関係性を確認するため、Pearson による相関分析をおこなった。



TABLE3 化粧行動の男女差

	男性		女性		t値	有意水準
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
日常的化粧行動	83.28	52.91	239.33	63.37	-32.12 ***	
非日常的化粧行動	29.53	36.72	70.36	59.33	-10.06 ***	

\*\*\* $p < .001$

TABLE4 公衆場面での化粧行動

	男性		女性		t値	有意水準
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
不特定他者場面	1.19	0.58	1.47	0.76	-4.85 ***	
特定他者場面	1.30	0.66	2.32	1.07	-13.66 ***	

\*\*\* $p < .001$

TABLE5 公衆場面での化粧行動と実際の化粧行動の相関関係

	男性		女性	
	不特定他者場面	特定他者場面	不特定他者場面	特定他者場面
日常的化粧行動	-.108	-.051	-0.07	0.40 ***
非日常的化粧行動	.161 *	.160 *	0.47 ***	0.12

\*\*\* $p < .001$ , \* $p < .05$

TABLE6 公衆場面での化粧行動と規範意識の重回帰分析 (強制投入法)

	男性		女性	
	不特定他者場面	特定他者場面	不特定他者場面	特定他者場面
規範意識	-0.08	-0.01	-0.04	-0.10
決定係数	0.01	0.00	0.00	0.01

TABLE7 公衆場面での化粧行動と依存性の重回帰分析 (強制投入法)

	男性		女性	
	不特定他者場面	特定他者場面	不特定他者場面	特定他者場面
道具的依存	0.04	-0.06	0.13	-0.04
情動的依存	-0.18 **	0.02	-0.16 *	0.18 **
決定係数	0.03 *	0.00	0.03 *	0.03 *

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

その結果 (TABLE 5)、男性では『非日常的化粧行動』が『不特定他者場面』と、『非日常的化粧行動』が『特定他者場面』と有意な正の相関関係を示した。女性では『日常的化粧行動』が『特定他者場面』と、『非日常的化粧行動』が『不特定他者場面』と有意な正の相関を示した。

## 5) 公衆場面での化粧行動と規範意識

公衆場面での化粧行動と規範意識との関係性

を検討するため、男女別に公衆場面での化粧行動の各因子を目的変数とし、規範意識を説明変数とする重回帰分析 (強制投入法) をおこなった。

その結果 (TABLE 6)、男女とも『不特定他者場面』『特定他者場面』のそれぞれを規範意識が有意に規定することはなかった。

## 6) 公衆場面での化粧行動と依存性

公衆場面での化粧行動と依存性との関係性を検討するため、男女別に公衆場面での化粧行動

の各因子を目的変数とし、依存性の各因子を説明変数とする重回帰分析（強制投入法）をおこなった。

その結果（TABLE 7）、男性では『不特定他者場面』を情動的依存が負に有意に規定することが明らかとなった。女性では、『不特定他者場面』を情動的依存が負に有意に規定することが、『特定他者場面』を情動的依存が正に有意に規定することが明らかとなった。

## 考 察

### 1) 実際の化粧行動の構造

実際の化粧行動の構造を主成分分析によって検討したところ、日常的におこなわれている化粧行動項目による『日常的化粧行動』と、日常的にはおこなわれない化粧行動項目による『非日常的化粧行動』により構造化されることがわかった。

一般的に化粧行動は、施される部位により、髪、顔、身体に分類することができる。また、目的により、装飾、肌の手入れ、香りに分類することができる。しかしながら、若者の実際の化粧行動は、日常的におこなっているか否かの習慣性および頻度によって構造化されていることがわかった。

男女差を検討したところ、『日常的化粧行動』『非日常的化粧行動』のそれぞれで、男性に比べ女性の方がおこなっており、実際の化粧行動について、まだまだ男女差が大きくあることがわかった。

### 2) 公衆場面での化粧行動の構造

公衆場面での化粧行動の構造を主成分分析により構造化を試みたところ、病院の待合所、近所のスーパーといった不特定の他者がいる状況もしくは相対的に公的な状況である『不特定他者場面』と、同性の友人の家、トイレといった交友関係にいる者など特定の他者がいる状況も

しくは相対的に私的な状況である『特定他者場面』により構造化されることがわかった。

これは、平松・牛田（2007）の化粧を施す生活場面が、不特定他者との接触や公的性が高い場面項目による『公的場面』、不特定他者との接触が低く私的性が高い場面項目による『私的場面』によって構造化された結果と対応する。

男女差を検討したところ、『不特定他者場面』『特定他者場面』それぞれで、男性に比べ女性の方がおこなっており、公衆場面での化粧行動について、男性よりも女性の方が経験のあることがわかった。

### 3) 実際の化粧行動と公衆場面での化粧行動の関係性

男性では『非日常的化粧行動』が『特定他者場面』や『不特定他者場面』と有意な正の相関を示した。すなわち、日常的にはおこなわない化粧行動をよくおこなう者ほど特定・不特定他者の存在に関係なく、公衆場面での化粧行動をおこなう傾向にあることがわかった。

男性は、実際の化粧行動を多くはおこなっていない。そのようななかで、さらに日常的にはおこなわない化粧行動をおこなうことで、外見に対する不安感が生じ、化粧直し行動として『特定他者場面』や『不特定他者場面』で化粧行動をおこなっているのではないかと推測される。

女性では、『日常的化粧行動』が『特定他者場面』と、『非日常的化粧行動』が『不特定他者場面』と有意な正の相関を示した。すなわち、日常的におこなう化粧行動をよくおこなう者ほど特定の他者が存在する場面で化粧をおこない、日常的にはおこなわない化粧行動をよくおこなう者ほど不特定他者の存在する場面で化粧をおこなうことがわかった。

今回の調査対象者が大学生であることを考慮すると、『不特定他者場面』を構成する病院の

待合所、近所のスーパー、劇場のなかなどは日常的生活場面ではない。それに対して、同性の友人の家、トイレ、休み時間の教室などは日常的生活場面である。したがって女性では、日常におこなう化粧行動ほど、生活場面である『特定他者場面』で化粧をおこない、日常あまりおこなわない化粧は、非日常的である『不特定他者場面』で化粧をよくおこなっていると推測される。

#### 4) 公衆場面での化粧行動と規範意識

男女とも、公衆場面での化粧行動を規範意識が有意に規定しないことがわかった。

平松・牛田(2009)などにより、化粧行動における規範意識である「化粧規範」について検討がおこなわれ、その存在が確認されている。

今回用いた久世ら(1988)の規範意識尺度は、対人関係などにおいて、多くの者によって共有されている伝統的・慣習的な言動についての基準や習慣などに対する意識を測定するものであった。そのため、化粧は対人関係と深く関わる行動であるものの、久世ら(1988)の規範意識尺度では化粧行動に関わる規範を正しく測定できていない可能性が推測される。

#### 5) 公衆場面での化粧行動と依存性

男性では『不特定他者場面』を情動的依存が負に有意に規定することがわかった。すなわち、自己の心情的な安定を求めるために依存する程度の低い者ほど『不特定他者場面』で化粧行動をおこなっていることがわかった。

繁樹(1968)によると、依存性が高い者ほど同調行動をとりやすい。男性では実際の化粧行動も公衆場面での化粧行動もあまりおこなっていない。そのようななかで、『不特定他者場面』で化粧行動をおこなうことは、公衆場面で化粧行動をしないという行動に同調していないからだと推測される。

女性では、『不特定他者場面』を情動的依存が負に有意に規定することが、『特定他者場面』を情動的依存が正に有意に規定することがわかった。すなわち、自己の心情的な安定を求めるために依存する程度の低い者ほど『不特定他者場面』で化粧行動をおこなっており、自己の心情的な安定を求めるために依存する程度の高い者ほど『特定他者場面』で化粧行動をおこなっていることがわかった。

男性同様に、女性が『不特定他者場面』で化粧行動をおこなうことは、公衆場面で化粧行動をしないという行動に同調していないからだと推測される。そのため、情動的依存が負に有意に規定したと推測される。しかしながら、『特定他者場面』を情動的依存が正に有意に規定した理由として、『特定他者場面』は同性の友人の家や休み時間の教室など友人関係にある特定の者とともにいることが多い場面である。そのため、公衆場面で化粧行動をおこなうとする同様な意識をもっている友人に同調して公衆場面で化粧行動をおこなっているため、『特定他者場面』を情動的依存が正に有意に規定したと推測される。

#### まとめと今後の課題

本研究の目的は、公衆場面における化粧行動と規範意識や依存性について検討をおこなうことであった。得られた結果を要約すると、以下の通りになる。

- 1) 男女とも『不特定他者場面』『特定他者場面』のそれぞれを規範意識が有意に規定することはなかった。
- 2) 男性では『不特定他者場面』を情動的依存が負に有意に規定することが、女性では『不特定他者場面』を情動的依存が負に有意に規定することが、『特定他者場面』を情動的依存が正に有意に規定することがわかった。



今後の課題として、規範意識のなかでも特に対人関係における規範意識と化粧規範の関係性に関するさらなる検討が必要である。また、依存性と関連する同調性などといった他の個人差要因と化粧規範との関連についても検討をおこないたい。さらには、若齢者と高齢者とのあいだの規範意識の違いなど、世代間における比較検討をおこないたい。

## 参考文献

- ・ベネッセ教育開発センター 1999 モノグラフ高校生、55、27
- ・中央調査報 2001 車内マナーに関する意識調査、中央調査報、522、1-3
- ・平松隆円・牛田聡子 2003 化粧に関する研究（第1報）—大学生の化粧関心・化粧行動・異性への化粧期待の構造解明—、繊維製品消費科学、44（11）、58-68
- ・平松隆円 2007 公衆場面における化粧行動と自己化粧の入念度の関連性、繊維製品消費科学、48（11）、42-49
- ・平松隆円・牛田好美 2007 化粧規範に関する研究—化粧を施す生活場面とそれを規定する化粧意識と個人差要因—、繊維製品消費科学、48（11）、59-68
- ・平松隆円 2009 化粧にみる日本文化、水曜社
- ・平松隆円 2010 公衆場面での化粧行動への社会的是非と個人差要因の関連性、ファッションビジネス学会誌、15、33-42
- ・風間大治・秋山登代子 1981 現代の青年像—70年代を中心とした青年の意識変化—NHK 放送文化調査研究年報、26、1-58
- ・厚生労働省 2006 『薬事法』改正平成18年6月21日法律84号
- ・久世敏雄、和田実、鄭曉齊、浅野敬子、後藤宗理、二宮克美、宮沢秀次、宗方比佐子、内山伊知郎、平石賢二、大野久 1988 現代青年の規範意識と私生活主義について、名古屋大學教育學部紀要、35、21-28
- ・ポーラ化粧文化研究所 2008 電車内でのメイク状況、化粧と生活の調査レポート
- ・繁榊算男 1968 依存性と同調行動の関連について、日本教育心理学会総会発表論文集、258-259
- ・菅原健介 2005 羞恥心はどこへ消えた？、光文

社、24

- ・辻正三 1969 「依存性テスト」の検討、東京都立大学人文学部、2、11-23
- ・米澤泉 2001 「化粧センス」を競う女性たち、化粧文化、41、20-25

